

殺しのあとで愛を

COMPROMISING POSITIONS

初版印刷 一九七九年九月一日

初版発行 一九七九年九月五日

定価 二二〇〇円

訳者紹介

真崎義博

一九四七年東京に生まれる。明治大学文学部英文科卒業。翻訳家。訳書に「呪術師と私——ドンファンの教え」「呪術の体験——分離したリアリティ」「呪術師に成る——イクス・トランへの旅」「呪術の彼方へ——力の第二の環」(以上カルロス・カスターナダ)、「ニューヨーク・ブルース」(ポール・ウィリアム)、「フィスト」(J・エスターハズ)、「死の統計」(トマス・チャステイン)、共訳書に「未開社会における性と抑圧」(マリノウスキー)、「河の旅・森の生活」(レイモンド・マンゴ)がある。

著者 スーザン・アイザックス

訳者 真崎義博◎

装幀 平野甲賀

発行者 辻信太郎

発行所 株式会社サンリオ

東京都品川区西五反田七の二二の一七
TOCビル五F

電話 〇三(四九四)五三三三

印刷 株式会社工友会印刷所

製本 田中製本株式会社

©1979, YOSHIHIRO MASAKI, PRINTED IN
JAPAN 0397-79031-2831

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

殺しのあとで愛を

スーザン・アイザックス

真崎義博訳

COMPROMISING POSITIONS

by Susan Issacs

Original Copyright © 1978

by Jove/HBJ

Japanese translation rights arranged with
Gloria Safier, Inc., New York through
Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

この世でもっともすばらしい人
エルカン・アブラモヴィッチへ

著者のことは

本書を執筆するにあたり、左記の方々から有益な助言や励ましをいただきました。この場で感謝の意を表わしておきたく思いますが、小説にするために事実を歪めていることもありますので、お詫びも申し上げておきます。

ジョナサン・ドルジャー、ロバート・B・フィスク・ジュニア、メアリ・フィッツバトリック、フレッド・ハフエッツ、キャロル・ハリス、ヘレン・アイザックス、モートン・アイザックス、ロバート・ジューピター、レナード・S・クライン、デイヴィッド・メンダルスン、エデイス・メンダルスン、ハーバート・メンダルスン、キャサリン・モーヴィロ、ローレンス・ペドウィッツ、メアリ・ルーニイ、ポール・G・トリンズ、ウイリアル・ウォールド、フレッド・ワッツ、ジェイ・ズイス、スーザン・ズイス。

そして、知性豊かで洞察力にすぐれ、いつも親切にして下さった編集者のマーシャ・マギルには、特に感謝しています。

目次

歯科医殺害事件	9
脱税容疑	20
深入り	33
楽しい秘密	43
葬儀会場の人々	61
うわさ話	71
『重大なこと』って……	84
罪の報い	98
二本の傷	112
気まずい関係	129
M・Y・O・B（人のことに首を突っこむな）	141
シャープ警部補	163
凶器の行方	179
ポルノグラフィ	193

みんなのアリバイ

204

写真の女

221

動機

231

ブレンダ

253

密告者

292

気弱な告白者

307

訳者あとがき

319

登場人物

ジュデイス「バーンスタイン」シンガー（事件にまきこまれる人妻）

ボブ（ジュデイスの夫）

M・ブルース・フレックスタイン（歯槽膿漏専門医）

ノーマ・フレックスタイン（ブルースの妻）

ブレンダ・ドゥンク（ブルースの義姉）

ディッキー・ドゥンク（ブレンダの夫）

ナンシー・マクラレン・ミラー（ジュデイスの友人）

マリリン・オコナー・タッチオ（ジュデイスの隣人）

メアリ・アリス・マーニー（ジュデイスの友人）

フェイ・ジェイコブズ（ジュデイスの友人）

ジョー・ジェイコブズ（フェイの夫、地方銀行の副頭取）

クレイモア・カッツ（弁護士）

ローナ・ルイス（看護婦）

プレスコット・ヒューズ「スコッティ」（ジュデイスの息子、ジョ

ーイの保育学校の友達の母親）

ジム・ホーガン「カップケーキ」（巡査）

ラミレイス（ナッソー・カウンティ警察の刑事主任）

ネルソン・シャープ（警部補）

歯科医殺害事件

葬儀のときに人々がささやきあっていたとおり、ドクター・M・ブルース・フレックスタインは、ロング・アイランドでもっともすぐれた歯槽膿漏専門医のひとつだったし、ハンサムでもあった。が、その逞しい白衣のうしろ姿を見せたのは、ノヴォカインという麻酔薬を打って歯ぐきの治療が一段落したからではなかった。おそらく、うんざりして、あるいはその薄く締まった唇に浮かんた作り笑いを隠そうとして、背を向けただけなのかもしれない。だが、それはまったく不幸な動作だった。何者かがその期をとらえ、細く鋭く上がった凶器を取り出して、フレックスタインの後頭部に突き刺したのだ。

ヴァレンタイン・デーの夜のことだった。わたしの子ども

もたちは部屋に寝そべってテレビに見入り、いつになくおとなしかった。たぶん、ヴァレンタインのお菓子を食べすぎて、文句を言い合ったり、とつくみ合いをすることさえ煩わしいかだったのだろう。わたしはひとりで椅子に座り、台所にあるテーブルの脇の、霜のついた窓に描いた矢の通ったハートを指でたどりながら、夫の帰りを待っていた。

フレックスタインは、自分の診察室の床に横たわっていた。その現場も、静まりかえっていたにちがいない。殺人犯は、自分にとって致命傷となる目撃者のいないことを確かめ、凶器の血のりをティッシュで拭い、オフィスを荒らして、十分ほどその場にいただけなのだ。むろん、仮にフレックスタインが金切り声をあげるなり、大声を出すなり

したところで、わたしにはなにも聞こえなかっただろう。

シヨアヘヴン・コロニアル・プロフェッショナル・ビルディングの三〇五号室の彼の診察室は、シヨアヘヴン・エイカーズにあるチューダー様式のわたしの家から一〇分の所にある。実際は、シヨアヘヴン・ハーフ・エイカーズというべきなのだが、ナッソー・カウンティ、ノース・シヨアの開発業者たちがロバー・パロン家の庭というゴールド・コーストとしての評判を不朽のものにしたいと言いつ張ったのだった。というわけで、F・スコット・フィッツジェラルドのイースト・エッグから数分の所に、六〇フィート×一〇〇フィートの敷地に建つ中二階のあるシヨアヘヴン・エステイトがあり、一九世紀の鉄道界の大地の土地に不規則に建つ、中産階級の上の人びとの住む赤レンガのアパート、シヨアキャッスルがあり、太陽の下でまばらにはえた杜松と、場所を奪い合っているアルミ張りのミニ・タラともいふべきシヨアヘヴン・マンションズがある。

わたしがフレックスタインの死を知ったのは、事件から二時間ほど過ぎてからだった。そのときわたしは、三〇マイル離れたマンハッタンに局をもつ、ニュース専門のラジオ局の放送を聞いていた。

「ロング・アイランドの通信員、デューク・グレイから報

告が入りました」アナウンサーが言った。わたしは耳をそばだてた。ボブの乗った列車が遅れるかもしれない。きっと、ポイントでも凍りついたのだろう。

「そうなんだ、ジム」まるでブリテンの戦闘を報告するエドワード・R・マロウのように、別な男が喋りはじめた。「シヨアヘヴンから報告いたします。当地で、一時間ほどまえに、何者かに殺害された歯科医師、マーヴィン・ブルース・フレックスタインの死体がその診察室で発見されました」男は報告をつづけた。それによると、明らかに手掛かりはなにも残されていないようだが、ナッソー・カウンティ警察当局は、夜遅く見解を発表するという。「以上、シヨアヘヴンからだ、ジム」

「ありがたい、デューク」

「なんということでしょう」ラジオのスイッチを切りながら、わたしは思った。「彼のことなら知っているわ」映画館の切符を買う列でフレックスタインを見かけたことがあるし、学校での父母の会でも。それに、ジョーイを身ごもって六カ月目のころ、診察してもらったこともある。わたしは鏡に見入って、からだ中でふくれていない唯一の部分になってしまった顔、少しばかりアーモンドのような形をした眼、張り出した頬骨を見つめていた。それは疑いも

なく、ミンスクへ遠征途中のモンゴルの侵略者が、曾曾祖母に与えていった形見なのだ。わたしは鏡に写る自分にほほえみかけ、それを発見した——腫れた歯ぐきから、ほんのわずかに出血していたのだ。かかりつけの歯科医は、ドクター・フレックスタインのような歯槽膿漏の専門医に診てもらうように勧めた。わたしは、そのアドヴァイスに従った。

彼は、まるで友人のようにあいさつをした。「やあ、ジュディ」

「ジュディスです」 わたしは、反射的にこう答えていた。「わかった、ジュディス」 そのときわたしは、おとなとしてもしっかりした態度をとる機会を失ってしまったことに気付いた。冷静に、「ミセス・シンガーです」とか、「ミズ・シンガーです」とか、「ミズ・シンガーです」とか、「ミズ・バーンスタイン・シンガーです」と答えるべきだったのだ。わたしは言われるままに口を大きく開け、赤ん坊のよだれかけよろしく顎の下にナプキンをされていた。わたしの視線は、フレックスタインのアジャスタブル・ライトに書かれた『キヤッスル』という文字から、その王子様のような、大映しになった顔へ移っていった。彼は、ぞっとするような先のとがった金属の棒で歯ぐきをこすり、ときおりその手を止めて、

ラヴォリスでうがいさせた。

歯牙川の麻糸
「デンタルフロスを使っていないね？」

答はわかっているくせに、彼はこう訊いた。

「ええ。でも、これからは使います」

「その方がいい。ウォーター・ピックは？」

「もっています」 こう答えると、口のなかで、水の通る管が大きな音をたてた。

「それを使いなさい。シンクの前にただ置いておいたんでは、なんの役にもたないからね、そうだろう、ジュディス？」 その声は、もの悲しくうんざりする感じであり、わがままな退廃主義者に無視された予言者のようでもあった。

「そのとおりですね」 自分のだらしなさや忘れっぽさを見破る専門家に対していつも感じるような恥ずかしさを、このときも感じた。ときたま、わたしは、ヴィタミン・ミネラル剤を飲まなかったとか、足の爪がのびてぎざぎざになっているとか、月に一回自分でする乳ガンの検査を抜かした、とかいうことを思い出すのだ。

それでも、フレックスタインは悪い感じではなかった。歯ぐきに塗る薬を渡され、忘れずにすりこむように、と言った。そして、わたしのお腹に目をやると、「お大事に」

と言った。

「ありがとう」

「初めて？」

「いえ、ふたり目です。キャサリンという三歳の女の子がいます。ケートと呼んでいますけれど」

「それは素晴らしい。それじゃ、お大事に」

「ドクター・フレックスタイン」わたしは訊いた、「おいくらですか？」

「それは、看護婦に訊いて」にっこり笑うと、彼は診察室を出て行った。

べつに『俺』おまえ』という間柄ではなかったが、彼が殺されたというニュースには、からだがわなわなと震えてしまった。ほとんど無意識のうちに、表、裏、ガレージの三個所のドア・ノブをひねってまわった。ちゃんとロックされていた。それから、外の照明燈のスイッチをひねった。さらさらした二月の霜に覆われた草が、青白い不気味なもやに包まれてはいたが、ぶらんこの陰や葉の落ちたバラの陰に、気の狂った殺人者が潜んでいるようにには思えなかった。

「ケート！ ジョーイ！」 こう叫んだわたしは、ふたり

が大きな音をたてて階段を上がって行くまで、不安な思いで待っていた。「もう寝る時間よ」

「パパが帰って来るまで待っていちやいけないの？ 『スター・トレック』が終わってないんだよ。ずるいや」 ふたりは交互に文句を言い、ひとことごとに声が大きくなっていった。

「しーっ！」 わたしはふたりを二階のそれぞれの寝室まで追いたてるように連れて行った。ベッドに寝かせてやさしく髪をなでてやり、額にキスをし、ふとんをかけてやった。ドアは半分開けておいた。そして、忍び足で階段をおり、廊下からは台所まで小走りになり、電話に突進した。「ナンシー」 五回目のベルで彼女が出たときには、ほっとして溜息をついてしまった。「わたしよ」 ナンシー・マクラーレン・ミラーとは、ウィスコンシン大学の、植民地時代のアメリカ史のクラスで知り合った。ショアヘヴンに住んでいるのも、いつてみれば彼女がいるからだ。ナンシーの家はここから二マイルの所にあり、少なくとも一週間には一度は会っている、いや、会う必要があるのだ。「ニュースを聞いた？」

「聞いてないわ」 もう二〇年近くもヴァルドスタへは帰っていないのに、そのハスキーな声からはいまだにジョー

ジア特有ののろくさい話しぶりがぬけていない。「なにがあったの?」

深呼吸をしてからわたしはニュースで聞いたことを喋り、もう一度短かく息を吸って訊いた。「彼のこと、知っている?」

「とんでもない、知らないわ。でも、うわさを聞いたことはあるわ。それより、ねえ、ジュデイス、誰が殺したのかしら?」

わたしが麻薬中毒者ではないかと言うと、ナンシーはそうではないと答えた。彼女の考えでは、ありそうもないことだと言う。わたしは、何年も治療を受けているのに、歯ぐきからの出血が少しも止まらないで、とうとう怒った患者が殺したのかもしれない、と言った。

「ちがう、ちがう」彼女は、こう答えた。「ねえ、わたしのお母さん流の言い方をすれば、彼は無作法者だったのよ。いちばん可能性が強いのは、彼が交^あつてゐる女ね」そのとき気付いたのだが、南部の女は、普通ではとても口に出せないことを平気で言う。しかも、堅い人が耳にしたら顔をひきつらせるようなことでも、まるで「彼女、かわいくない?」とでも言うように言つてのけるのだ。

「本当?」わたしは訊き返した。「だって、どう見ても、

ドン・ファンというタイプじゃなかったわよ」

「ジュデイス、あなたって、そういう状況にぶつかつてもなにもわからない人だものね。自分に話しかけてくる男はみんなお堅い話をしたがつてゐる、そう思いこんでいるんだから」彼女の声が一段と大きくなった。「男というのはね、話なんてどうでもいいのよ。あなた、男がどうすればわかるの?」ズボンからあれをひっぱり出して、目の前でブラブラさせるまでわからないの?」

「そうしてもらえれば、わたしにもわかるわ」わたしは認めざるを得なかった。「でもね、ナンシー、どうして彼女の女のひとりが殺人なんかを?」

「たぶん、女のあそこにキッスしてあげなかったからでしょ」

「それにしたつて、石を投げつけるとか、液体洗剤をかけるとかすればいいのに。殺すというのはちよつとやりすぎだと思わない?」

「思わないわね」彼女はきつぱりと言い切った。「これっぽっちも、やりすぎだなんて思わないわ」

わたしたちは、それから何分かお喋りをつづけた。わたしがつこくせがむと、ナンシーが、フレックスラインとこのあたりに住む何人かの女性が関係しているといったう

わさを聞いたことがある、と教えてくれた。が、細かい点については、彼女にも思ひ出せないようだった。「彼の奥さんはどう思うかしら？」わたしは考えこんでしまった。「なんという名前なの？」

「ちよつと待つて……ノーマー、ノーマ・フレックスタインだわ」

「そう、ノーマだったわ、確かに」紹介されたことはなかったが、治療を受けているときに、一度か二度見かけたことがあったのだ。背が高くてほっそりとし、短めの白くなつた髪をうしろへ流して面長な顔の輪郭を際立たせていた。美しいというのではないが、攻撃的なくらい魅力にあふれ、ロング・アイランドの気丈夫な女という感じだった。それでいてどこかもうさがあり、その一流の身だしなみと相まってノレルやエステーの甘い雰囲気漂浮させていた。それぞれの手の指には三つ四つの銀の指輪をしていた。そして、オーダー・メイドのジャンプスーツを着、胸の谷間がはつきりと見てとれるほどファスナーを下げ、大きなルイ・ヴィトンのハンドバッグをもったり、グッチのバッグを細い腕にはさんだりしていた。わたしには、そうした完璧な女性のもつ意味や、そういう女性がなぜ存在するのかを理解しかねる感じがあつた。

彼女たちは、わたしたちのような女に美容体操をするこ
とや、爪を磨くことを思ひ出させるための神の使者、母の
代理人なのだろうか？ もし、毎日ボディ・クリームをた
っぷりと使い、髪をドライヤーで整えることを怠ると、夫
に見放され、子どもたちにばかにされるぞ、と警告してい
るのだろうか？ わたしは、そうしたぐいぬの女性同志の
会話を、レストランやデパートで立ち聞きしたことがある
が、いつでもフアッションやヴァケイションの話か、さも
なければひどく月並みな誰と誰が密かに性関係をもつた
かまたないとかの話なのだ。話すことは他の月並みな女と
同じなのに、それでもなにか奇妙な、かけ離れた世界の人
間に思えてしまう。

「奥さんがどう感じるかまでは、わたしにもわからない
わ」ナンシーが答えた。「でも、クロゼットを開けて、葬
儀用の完璧な黒いドレスをひっぱり出すことだけは確か
よ」

なにか新しい情報が入り次第電話をするという約束をし
て、わたしたちは受話器を置いた。わたしは台所のテーブ
ルに向かつて座り、包装用の麻布のようなポリエステルの
テーブルクロスへのりに指をはわせながら、同世代の男の
死体——わたしは三四歳、フレックスタインはせいぜい六、

七歳上にすぎないだろう——が、警察の死体公示所の平板に横たわっている図を想像していた。なぜそんなことに？
いったい誰がそんな恐ろしいことを？

やがて、ボブの車がドライヴウェイに入って来る音が聞こえ、わたしは大急ぎでステークをプロイラーに入れた。ゆっくりとトマト・ジュースを飲めば、わたしにコートを渡し、ダイニング・テーブルにかけつけて、なにも用意ができていないことに気付くころには、肉も焼きあがっているだろう。わたしはゆっくりと玄関へ行き、ドアを開けた。どうせ、家の鍵でなくわけのわからないファイリング・キヤビネットの鍵をさしこもうとして、もたもたとキー・ホルダーをがちやがちややっているにちがいないと思ったからだ。

「ありがとう」　こう言いながら、ボブは家へ入ってきた。「今日はどんなだった？」　いつものようにわたしの頬へ唇を近付けて、からだをかがめた。が、きつとわたしが動いたのだから、彼はわたしの右目にキスをしてしまった。彼は、そのことには気付かなかったようだ。「まったく」
彼が息をついた。「ひどい一日だった」

「ヴァレンタイン・デー、おめでどう」　わたしはこう答え、クロゼットのいちばん上の棚からプレゼントを取り出

した。地図や図がたっぷりと入った、中世のフランスでの生活に関する本だ。

「ありがとう」　彼が言った。「食事のあとで開けることにしよう。なあ、ジュデイス、ぼくの方は、なにも買っている暇がなかったんだ。それに、なにを買ったらいいかわからなかったし。明日、どこかで気に入った物を買ってほしい。いいね？」　こう言うとき少し間をおき、こう言い加えた、「まったく疲れ果てたよ」

「ねえ、あなた素敵よ」　これは本当だった。ハンサムというよりは、素敵というのにふさわしい品性のある顔つきだ。背が高く、ほっそりしている。身長は六フィートを少し越え、カールした明るい茶色の髪、まっすぐで長い鼻、薄い青色の眼の外側には笑いじわ——本当は、目を細めるとできるのだが——疲労が顔に出ることはめったにない。そう言われてみると、肩が少し落ちていりしひげの生え方にむらがあるかもしれない、が、ボブはいつも遅しく、生き生きとし、健康的にみえるのだ。ケロッグのコーン・フレークの広告のように、わたしの浅黒さに比べると明かい肌の色をしたアメリカ人という感じだ。わたしの方は、『ニューヨーク・シテイ——人種のるつぼ』というドキュメンタリーに出てくる群衆のひとり、といったところか。